インクルージョンを形成する教育対話研究

【代表者】香川 奈緒美 島根大学 教育学部 准教授

【共同研究者】深見 俊崇 島根大学 教育学部 教授
高橋 泰道 島根県立大学・島根県立大学短期大学部 人間文化学部 保育教育学科 教授

【研究の目的と内容】

インクルージョンの理念のもと、すべての人がその持ちうる多様な複数の能力を最大限に維持・向上させ、幸福に生きられるために教育が行われるべきとする考え方は、国内外で広く受け入れられている。しかし、インクルージョンとは、学校教育の授業において具体的にどのような実践であるのか、については十分な研究がない。本研究は、授業中の学習者と教師がつくりあげる対話を分析し、教師のどのような発言がよりインクルーシブな学びの環境づくりに寄与しているのかを解明する。

A)授業観察調査:
学級内の対話の時間が確保されやすい「特別な教科 道徳」の授業を中心に取り扱う。教師に通常通りの授業を実施して頂き、それらの授業の中で行われた対話を記録する。

B)フォローアップインタビュー調査
授業実践を行った教師に対して 30 分程度のインタビュー調査を行う。授業の目的や授業計画を確認するとともに、特定の発言についてその意図について聞く。

C)対話分析
発言をその目的に従って分類分けすることを試みた教育対話のためのガイドブック(T-SEDA Collective, 2021)を活用し、対話の構造とその他の特徴を明らかにする。

【研究の成果(本研究によって得られた知見、成果、論文、学会発表、外部資金への応募見込み等)】

本研究では、インクルーシブな学びの環境づくりが求められる昨今の教育現場において、どのようにインクルージョンの理念が実践されているのか、という問いに従い、小学校の授業観察を実施した。島根県内の2つの小学校に出向き、主に 4 名の教師が行う合計48時間分の授業を記録した。授業で扱う内容や科目は、国語、算数、英語、など幅広く、学年も1～6 年生のすべての学年を対象とした。そこで行われた対話の内容を分析し、対話のパターンを分析した。その結果、まずは、授業内の対話の時間はごく限られていることが見えてきた。時々、グループワークの時間など、学習者同士が話し合う行動はみられたもの、かなり時間が制限されていたり、対話として成り立つほどの内容の深さがなかったりと、分析の対象とする対話を特定することに困難があった。また、対話のパターンとしては、教師と学習者の一問一答という形式がほとんどであった。ある学習者の発言が別の学習者の発言につながり、また別の学習者へという流れはみられず、個々の学習者が教師と単発の発話を繰り返していた。教師は、学習者の対話を促進したいというおもいは保持しつつも、それぞれの授業でこなすべき内容の消化に苦労している様子がみられた。学習指導要領により、対話的な学びの推進がますます推し進められているものの、教育現場においてそれが可能となる仕組み作りが必要である。

本研究の成果を用いて、「国際共同研究加速基金(海外連携研究)」の申請書提出に至った。引き続き学校教育に関わる教師と学習者の対話の実践に注目し研究を進める。